

コンクールで お会いしましょう

——名演に飽きた時代の原点

中村絃子
Nakamura Hiroko



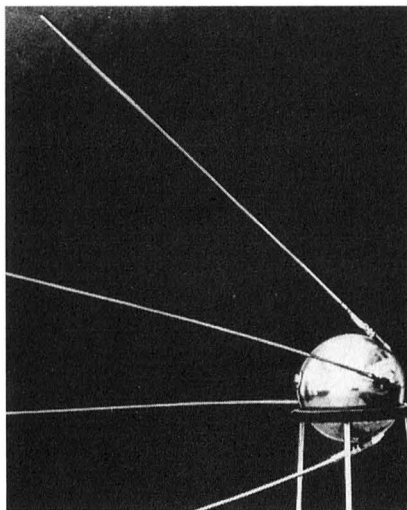
第四章 音楽と政治——チャイコフスキー・コンクール

東西冷戦のなかで

第一次世界大戦後、一九二七年の第一回ショパン・コンクール開催を皮切りに、ヨーロッパ各地には次々と国際コンクールが誕生します。

ここではピアノのコンクールだけをとり上げますが、まずハンガリーのブダペストにフランス・リストを記念するコンクールができました（三三年）。次いで、ブリュッセルにベルギーのヴァイオリニスト、ユージン・イザイエの名を冠したヴァイオリンとピアノのコンクールが、当時のベルギー皇太后でイザイエの弟子でもあったエリーザベト妃によって設立されますが、これは第二次世界大戦後の五二年、クイーン・エリーザベト・コンクールと名称を変え、新たに発足します。

一九三九年にはスイスのジュネーヴ国際コンクールなどが活動を始めますが、第二次世界大



スプートニク1号 (1957年、AP/WWP)

今日ではすっかり明らかにされたことですが、当時ソ連の一般市民は、極めて劣悪な生活環境を強いられていました。一九五〇年代になって、モスクワ市民はやっとひと息つけるようになった、ともいわれます。もちろん、だからといって食糧の品質が上がったわけではなく、慢性的な品不足はついにペレストロイカの起る八〇年代になるまで変わることはなかった、と。

そんななかで、一九五七年、ソ連は大陸間弾道ミサイルの開発に成功し、続いて人類初の人工衛星「スプートニク1号」を宇宙に向けて飛ばすのです。

「アメリカ合衆国に対する大勝利」「ソ連体制の栄冠」「月面への第一歩」とソ連の新聞は盛大に報じ、アメリカは衝撃を受け

る西側の資本主義にすべての点で勝るものであると証明するため、スポーツや音楽文化を組織的に保護してきました。そしてこの国策は、第二次世界大戦であるのナチスドイツに勝ったあとますます加速されます。あたかも、貧しい市民生活におけるアメリカとの落差、劣勢を覆い隠すかのように。

前にも述べましたが、ソ連をはじめとする社会主義諸国は、その体制がアメリカを頂点とす



アルトゥーロ・ベネデッティ・ミケランジェリ (写真左、1957年、Interfoto/Orion Press)

戦終結を迎えると、コンクールの数はさらに加速度的に増えていきました。

一九四三年にはいち早くパリに、ピアニストのマルグリット・ロンとヴァイオリニストのジャック・ティボーによって「ロン・ティボー・コンクール」が創設されます。

一九四九年には、イタリアのボルツァーノ市に、ピアニストのミケランジェリなどによってフェルツチオ・ブゾニを記念するコンクールが生まれ、そして五〇年代には「ミュンヘン・コンクール」、そして今述べたベルギーの「クイン・エリーザベト・コンクール」という二つの重要なコンクールが開始されます。

そうして、一九五八年、あの「チャイコフスキー・コンクール」が、登場するのです。

ました。当時のアメリカの力では、ごく軽量の衛星を軌道に乗せるのも容易なことではなかった。その「軽量の衛星を軌道に乗せる」にしても、アメリカの科学者たちは、少なくともあと四回は試験発射をしなければとても無理、と青ざめました。

そんな状況のなかで追い打ちをかけるように、科学だけではなくソ連の芸術文化の優越性をも天下に示すべく、その社会主義体制の威信をかけた「チャイコフスキー・コンクール」の開催が発表されます。

コンクールはピアノ、ヴァイオリン、チェロ、声楽（男声と女声）の各部門に分かれ、組織委員会委員長には、かつてスターリンから「人民の敵、形式主義者」と攻撃された作曲家のドミートリー・ショスタコヴィッチが就任します。ピアノ部門の審査員は総勢十七名。うちソ連は七名ですが、共産圏のルーマニア、ハンガリー、チェコスロヴァキア、ポーランド、そしてブルガリアを加えると、社会主義国が三分の二を占めることになります（そしてこの構成は、一九九二年まで変わることはありませんでした）。

ピアノ部門のソ連審査員の顔ぶれをみると、審査委員長のエミール・ギレリス以下、まさに当時のソ連のトップメンバーを揃えた観があり、圧倒されます。ドミートリー・カバレフスキー、ヘンリク・ネイガウス、レフ・オボリン、パヴェル・セレブリヤコフ（私は子供の頃、彼を東京で聴いたことがあります）、そしてあのスヴァトスラフ・リヒテル。

ソ連では開催の一年も前から、代表を決める選考会が始まっていました。その結果厳選され

た六名のピアニストたちは、人里離れたダーチャ（別荘）に、ピアノ付き三食付き車付きに医師まで付いて「幽閉」されました。そして、モスクワ音楽院の教授たちによる猛特訓が始まったのです。

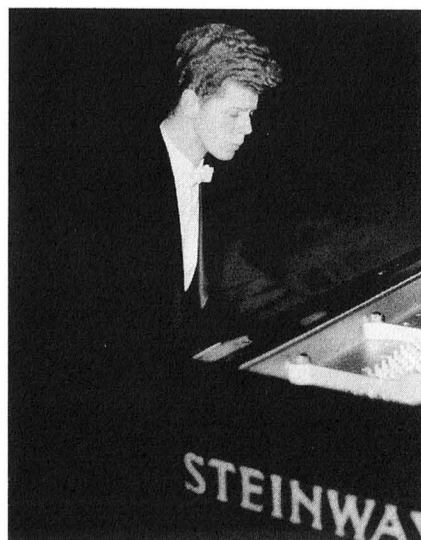
「あれはまるで人類初めての偉業を成し遂げる宇宙飛行士の合宿、といった感じだった」

と、のちにその厳選された六名の一人だったレフ・ブラセンコが、私に語ってくれたことがあります（ちなみに彼は二位でした）。

ヴァン・クライバーン

さて、もう一つの「超大国」アメリカといえば、この世に国際コンクールというものが現われて以来、アメリカの若手がいい成績をあげたためしはありませんでした。いつでもどこでも、ソ連人が優勝をかつさっていく。

一九五一年にクイーン・エリーザベト・コンクールのヴァイオリン部門で、ソ連勢が一位（レオニード・コガン）、二位、五位、七位を占拠し、アメリカ勢が九位と十一位に終わったあと、アメリカには論争が起りました。ホントにアメリカの芸術文化は、大丈夫なのだろうか。というわけで、その翌年一九五二年のクイーン・エリーザベト・コンクールのピアノ部門をめざして、急遽「対策本部」が、なんと国務省のバックアップで結成されます。そして八名の



第1回チャイコフスキー・コンクールで演奏するヴァン・クライバーン（1958年、AP/WWP）

後も、モスクワやワルシャワの聴衆が、西側からの参加者に異常なほど熱狂することはよくありました。この時は、ソ連の審査員たちも信じられないような絶賛を口々に表わしています。あのリヒテルは、クライバーンを「真の天才」と呼び絶賛しました。リヒテルは二十五点満点の二十五点をクライバーンに投票し、あとの全

そして、マダム・レヴィンの予想は的中しました。コンクールが始まるやいなや、このひよろひよろと二メートル近くもある内気で優しい眼差しをした金髪のアメリカ青年は、またたく間にモスクワ中の人気を集めてしまったのです。彼の愛するラフマニノフを思わせる巨大な手で、クライバーンはロシアの音楽をいとおしむように弾き、それらが大曲難曲であることを忘れさせられるほど楽々と演奏しました。ナイーヴな優しさのこもったクライバーンの幸せそうな姿に、世界から隔絶され秘かにアメリカに夢にも似た憧れを抱いていたロシア人たちは夢中になり、酔いしれたのです。（当時も、そしてその

さて、私のジュリアード音楽院での恩師、ロジーナ・レヴィン女史は当時七十八歳。或る日、生徒の一人が置き忘れていったチャイコフスキー・コンクールの応募要領を偶然手にしたところから、現代の英雄伝説は始まります。そのコンクールの場が、彼女が青春時代を過ごしたあのモスクワ音楽院大ホールであることを知ると、彼女の胸には突然熱いノスタルジアが沸き起りました。そしてその思いのなかに、生徒の一人ヴァン・クライバーンが浮かび上ってきたのです。そう、彼がロマンティックなロシア人の好みに、ぴったりに感じられない……。

その後もアメリカは、あちらこちらで小さな成功はみせるものの、有頂天になれるような大勝利には縁がなく、フラストレーションはたまる一方でした。その上、ソ連からはアメリカ上空に向けてスプートニクが飛んでくる、大陸間弾道ミサイルは発射される……、もう踏んだり蹴ったり、といったところで、なんとフルシチョフから、挑戦状よろしく誘いがかかってきたのです。

「アメリカもぜひチャイコフスキー・コンクールに参加しないか」と。



ニューヨークを凱旋パレードするクライバーン（1958年、AP/WWP）

リーズがアメリカ人を夢中にするのと同じほど、市全体がそのとりこになってしまふのだ」。

そして、おそらくモスクワのクラシック音楽の聴衆というものも、彼は初めて見たわけでしょう。当時のソ連は、西側諸国に比べて「娯楽」が乏しく、その分人々はクラシック音楽に熱中しました。チャイコフスキー・コンクールでも、モスクワの聴衆は、（クライバーンに限らず）気に入れば手拍子を揃えて大騒ぎをする。きっとそんな様子にフランクフルは素朴に目をむいたに違いありません。彼のタイムズ紙へのレポートは昂奮に満ちています。

「ロシア人民、アメリカ人ピアニスト（二十三歳）を絶賛」に始まり、「テキサス州キルゴア出身の少年のような風貌をした巻毛の若者が、今夜もモスクワに旋風を巻き起す」。そしてクライバーンの優勝が決まった時には、ニューヨーク・

員に零点を入れたといわれます。そして、コンクールの審査は二度としないと言って、事実彼はそれから亡くなるまで、一切のコンクールに現われませんでした。

フルシチョフ首相自らが音頭をとって政治的目的で開催したこのコンクールでしたが、リヒテルをはじめとしたソ連の審査員たちに、政府からの圧力はなかったのでしょうか。あるいは、圧力があつたが故に、逆にその圧力に屈しないところをみせるために、聴衆の熱狂ぶりをむしろ審査員たちが利用してソ連のピアニストを一位にすることを押えたのか……（聴衆の好みと審査員の好み異なることはよくあることでしたから）。これは、今のところ「永遠の謎」です。

クライバーンにとって幸運だったのは、そこにニューヨーク・タイムズ紙のモスクワ特派員マックス・フランケルがいたことです。特に幸いだったことは、フランケル自身音楽はからきし分からなかったため、クライバーンの演奏自体よりも聴衆の熱狂ぶりの方に関心を持った、ということでした。

そもそも一九五〇年代のソ連では、一般市民がアメリカの一般市民に出会う機会など、まずありませんでした。革命以来、鉄のカーテンの向うに閉ざされたも同然だった国に、アメリカをはじめとした西側諸国から若者たちがやってきた！ それを迎えるモスクワは、フランケルの言葉によれば、「コンクールというものは当地ではただの文化行事ではない。ワールド・シ

くチャイコフスキーのピアノ協奏曲のレコードは、クラシック音楽として初めてミリオンセラーになりました。

クライバーンがソ連とアメリカの双方で巻き起した熱狂は、文字通り空前絶後のものでした。一人のクラシック演奏家が起した旋風としては、恐らく二十世紀最大のものだったでしょう。

このクライバーンの「成功」は、当時の東西冷戦という特殊な政治的状況、米ソという超大国間の政治的緊張と、新聞報道やラジオ、テレビといったメディアの力なくしては起り得なかった現象でした。チャイコフスキー・コンクールはその後四年に一度ずつ開催され、単に演奏内容だけに限って言えば、当時のクライバーンよりはるかに完成度の高いピアニストも一人ならず登場しましたが、「スター」には程遠い存在で演奏活動をしています。

ソ連崩壊による破綻

チャイコフスキー・コンクールは、その政治的な設立理由とクライバーン旋風のおかげで、二十世紀で最も重要なコンクールになりました。「クライバーン効果」とでもいうのでしょうか。モスクワには第二のクライバーンを夢見る俊英が世界から集結し、またそれを狙う国際的なマネージャーたちがずらりと勢揃いしたものです。

ソ連社会主義が経済的に破綻するまで、チャイコフスキー・コンクールはその威信をかけた



初来日したヴァン・クライバーンと著者（1966年、写真提供著者）

タイムズ紙は一面三段抜きの写真と四段抜きの見出しを掲載、「合衆国のピアニスト、ソ連のコンクールに優勝す」とぶち上げます。

このニューヨーク・タイムズ紙をはじめとするメディアのモスクワからの報道は、一カ月近いコンクールの期間中まるで実況中継のように続き、クライバーンの「進撃」とともにアメリカ中を熱狂させていきました。なにしろスプートニクで完敗したばかりのアメリカが、その最も苦手と思っていた芸術の領分で、それも「敵地」の首都モスクワで戦い快勝したのです。優勝したクライバーンを迎えるアメリカは熱狂の渦でした。

ニューヨークに凱旋したクライバーンは、六十万人の市民が紙吹雪をまき散らすなか、五番街をパレードします。ワシントンでは時のアイゼンハウワール大統領が空港に出迎え、ホワイトハウスでは祝賀大晩餐会が催されました。彼の出演料は一日ごとに鰻のぼりに上がり、あらゆるTVショーウから出演依頼が殺到しました。そして、彼の弾



第10回ヴァン・クライバーン・コンクールの審査員たち。写真前列右から2人目がクライバーン、4人目がワイセンベルク（1997年、写真提供著者）

「ワン・オブ・ゼム」になりつつあります。これも時代、ということなのでしょう。

話はまた横道に入りますが、一九九〇年、ソ連崩壊後の最初のショパン・コンクールでのことです。この時ロシアからは、ドレンスキーとブラセンコが審査員として来ていましたが、いつも陽気な二人がヒツソリとしていて、審査員控え室でも二人だけで隅の方にいる。事情は察せられましたが、なにしろ長いつきあいでもあるので、休憩のお茶の時間に二人を誘って、どうしたのよ、というと、ブラセンコがショパン・コンクールのプログラムを示してポツリと言いました。

「英語なんだ」

それまでは、ショパン・コンクールはもちろん、いわゆる東欧圏で行われるコンクールのプログラムは、その主催国の母国語とロシア語で書かれる決まりだったのです。それが一夜にして変わったのです。

スーパースターの運命

ところでクライバーンですが、一九三四年生まれの彼は現在六十九歳。テキサス州フット

ワース市の高級住宅地に十八エーカーもある大邸宅を構え、友人と愛犬と暮らしています。

彼はモスクワでの大成功のあと、そのアメリカでのスーパースターとしての人気とは裏腹に、批評家たちからこっぴどくやられてしまっています。今思えば無理ありません。レパートリーもたいしてないままに、一気にスーパースターとして超多忙になったのですから。

マネージメントのせいでもあったのですが、彼はチャイコフスキーとラフマニノフのコンチェルトばかり弾かされ、「まるでジューク・ボックス」と叩かれたり、「音楽スポーツ界のチャンピオン」とあざ笑われたりするうちに、演奏の方も乱れをみせはじめます。

六九年に彼がダラスでベートーヴェンの「皇帝」を演奏したのを聴いたあるピアニストは、「三楽章ときたら始めから

終わりまでほとんどろ憶え。それでもこいつは業界最高のギャラをとるのだ。しかも我慢ならないのは、もう女性たちのキヤアキヤアすること。まるで芸能人だ」と、いかにも正直に齒ざしりしています。

私がジュリアードに留学した一九六三年は、まだクライバーンの凱旋からそれほどたつてはいませんでした。学生たちは依然として「第二のクライバーン」めざして頑張っていました。しかしその頃の彼の演奏に話が及ぶと、みな顔をしかめて黙ってしまうのでした。しかし手厳しい学生たちも、クライバーンがキリル・コンドラシンの指揮で入れたラフマニノフのピアノ協奏曲第三番のレコードだけは愛聴していました。これは、クライバーンの初々しいロマンティズムが溢れた名盤だと、今でも私はそう思っています。

結局彼は四十三歳で、引退してしまいます。その後は、一九六二年にテキサス州フォートワースの「郷土の生んだ英雄」ヴァン・クライバーンを記念して設立された、「ヴァン・クライバーン・コンクール」のシンボル役として、また、あのケネディ一族にも似たアメリカの「ロイアル・ファミリー」の一員として、もっぱら社交の場で活躍します。近年では時々コンサートもするようになり、何年か前に日本にも来たことがありました。しかしその演奏そのものはや正面切つてどうのこうのといえるような対象ではなくなっていたようです。

私が一九九三年の「クライバーン・コンクール」の審査に招かれた折、彼は宏壮な自宅に二

百人の客を招いて、素晴らしいディナーをしました。客はまず庭先で彼の優しく心のこもった抱擁に迎えられ、控えていたカメラマンにポーズをとります。豪華な晩餐会の終わる頃にはその写真は銀のフレームに入れられ、一人一人に記念品として手渡されました。まるでそれは王族の謁見のようでした。帰りの車の中で私は、その素晴らしいパーティーの余韻に浸りながら思いにふけりました。ヴァン・クライバーンが、その素晴らしい資質と幸運なスタートに恵まれながら芸術家として成熟することなく終わってしまったのは、結局アメリカのこの豊かさ、「豊かな社会」の楽しい生活に原因があつたのではないかと。